

藤岡勝二・新村出の門下生 (3)

明治・大正の言語学 その7

佐藤喜之

1. 田中秀央

田中秀央^{ひでなか}は明治19年(1886)3月2日、愛媛県北宇和郡三浦村(現・宇和島市三浦西)で出生、生家は代々の庄屋であった¹。宇和島町立高等小学校、愛媛県立松山中学校を経て、明治36年(1903)9月、第三高等学校に入学した。三高時代に教えを受けたのが、後に田中秀央が入学する東京帝国大学言語学科の先輩でもある梵語学の榊亮三郎であった²。田中秀央は、榊亮三郎について、田中自身の進むべき道についての指針を榊から与えられたこと、また後年、田中が京都帝国大学に採用されるについても、榊の尽力があったことに言及している。

「先生は梵語学の専攻であられたが、英、独、仏の近代語に通じておられたほか、ギリシア語、ラテン語にもかなりの学力をもっておられた。当時は日本帝国に文科大学のあったのは東京帝国大学だけであり、そこには高楠順次郎先生³ [1866~1945] (榊先生とは気が合わぬ) が梵文学の講座をもっておられたので、榊先生は三高の教授としてドイツ語を教えておられた。先生にドイツ語を教わったのは二年生になってからであるが、先生の訳は頗るたしかであったが、読み方はお世辞にも上手とは言えなかった。(略) 二年生の時に、先生が昔ギリシア語、ラテン語という立派な言葉があって、世界の文化に大いに貢献したと話されたことがあったが、それが私をして西洋古典語をやってみようかという気持の種子となったのである。それまでは私は将来は英語の先生になるつもりでいたのである。(略) 榊先生は明治四一年京都帝国大学文科大学に文学科が創設されるや、直ちに迎えられて、その梵文学梵語学講座の教授となられた⁴。私の五大恩人の一人であって、私が後年、京都帝国大学へ奉職するようになり、今日に至ったのは先生の御尽力によるのである」(菅原謙二他編(2005)の「田中秀央自叙伝『憶い出の記』」pp. 84-86、以下「自叙伝」と略す)。

三高卒業後、明治39年(1906)9月、東京帝国大学文科大学言語学科に入学した。言語学科の同期には市河三喜、前田太郎、高畑彦次郎がいる。田中は京都に大学があればよいのに、と思ったようだが、京都帝国大学は明治30年(1897)に開学し、文科大学はようやく明治39年に設置されたが、その陣容もまだ整わず、言語学科が開設されるのは、明治41年である。

入学後は、言語学科の学生として、英・独・仏・伊・梵の諸語を学んだほか、本来の目的であるギリシア、ラテンの西洋古典語に力を注いだ。東京帝国大学言語学科の主任教授は藤岡勝二であったが、田中秀央が薫陶を受けたのは、哲学科の教師ケーベル Raphael von Koeber と、田中と同時に英語

1 秀央が生まれる前から家運が傾き、秀央の兄・良馬の代で没落、兄一家は京都へと移り住んだ。秀央は借金連帯保証人となっていたため、のちのちまでその返済に追われ、金銭的に困窮した。

2 榊亮三郎については、拙稿(2005)「初期の博言学科卒業生」学苑 775、を参照。

3 高楠順次郎については、拙稿(2004)「上田万年とその周辺」学苑 769、を参照。

4 榊亮三郎が実際に梵語梵文学講座教授に就任するのは明治43年。明治40年に助教授に就任している。

英文学科の教師として着任したロレンス John Lawrence であった。ケーベルと田中秀央の関係について、同期の市河三喜⁵は次のような回想をしている。市河もケーベルからギリシア語を習っている。

「自分も専門の立場からギリシャ、ラテンの智識を甚だ必要とするので、負けずに勉強した御蔭で間もなく先生の信用を博し一二度御馳走に招かれた事もあった。併し何と云つても先生に一番可愛がられて何かにつけて非常に御世話になったのは田中君である。田中君も万事先生に相談し先生の指図に従つて何事も決すると云ふ風であつた。実に先生が田中君に対して尽された親切は日本人の師弟の間には見られないやうな厚い情宜の籠つたもので、字義通り「恩師」であつた先生の死を異境で聞いた同君は如何に驚き悲しんだ事であらう」〈市河三喜（1923）「ケーベル先生について」思想 23，ケーベル先生追悼号，pp. 75-76〉。

田中はケーベルから西洋古典語の知識を得ただけではなく、金銭的な援助も受け、また度々ケーベル宅に招かれて夕食をとともにした。あるときケーベルに対して、

「多少心中誇らしげに西洋古典語のほか五つの言語を学習していると申しあげた。すると先生は *multum non multa* (*much not many*) と言われた。家へ帰ってこの句の意味を考えて、それまで一週三二時間ほど学習していたものを一週一六時間に減じ、一意力を西洋古典語の学習に注ぐことにした」〈「自叙伝」p. 134〉。

ケーベルの勧めにより、やはり西洋古典語に造詣の深かったロレンスから、大学の授業とは別に、ラテン作文、ホメロスやウェルギリウスの個人教授を毎週2時間受けた。ロレンスは大学の授業では西洋古典を受け持ってはいなかったが、田中はロレンスの *History of the English Language* などの英語関係の授業にも出席した。

田中秀央は明治42年（1909）7月、同期の市河三喜とともに東京帝国大学を卒業した。市河三喜に対して、田中は強い尊敬の念を抱いていた。

「父は負けるのが嫌いであつた。私の小学校低学年の作文の中で、確か家族で大文字山登山をした時の話題で、「他人に抜かれるのを、お父さんは負けるのがお嫌いなので…」と書いたことを記憶している。語学ならと自信のあつたその父が、この人は手強い、これにはかなわんと思った唯一の日本人は、東大同期の仲のよい友達で、東大卒業時には明治天皇家の銀時計を手にし、後に英語学の泰斗となられた市河三喜氏であつたという」〈山崎和夫（2002）「父 田中秀央の「思ひ出の記」」京都大学大学文書館だより 3，p. 4〉。

卒業後は大学院に進み、ケーベルから毎月30円を貰い、西洋古典語の勉強に専念した。卒業の翌年の1月に、東京帝国大学特選給費生第二回の公募があり、田中はケーベル、藤岡勝二に相談した上で応募した。結局、田中が給費生となったが、選ばれるに当たってはロレンスと市河三喜の配慮が大いに働いた。

「ある日の午後、市河君が、文科大学の正面の大講義室の大開き戸のかげに小生を呼び、特選給費生に志願したかと問われたので、志願したと答えたところ、それなら僕は引こうと言った。その時には、何故に市河君が引いてくれたのか、その理由は不明であつた（略）Lawrence 先生が、われわれ二人は卒業論文は同点であつたが、口頭試問で市河君が優っていたので、彼が言語学科を首席で卒業し、明治42年7月恩賜の銀時計をいただいたので、特選給費生の場合にも、彼が第一候補に挙げられるべき筈であつた。ところが、第一回の時に、英文科の千葉勉氏が選定されているので、第二回目にもまた、英語関係の市河君が申込むとなると、選定

5 ロレンスと市河三喜については、拙稿（2008）「藤岡勝二・新村出の門下生（2）」学苑 811，を参照。

の際、お互いに不利であるから、西洋古典学の田中に譲って、立候補を差控えてはどうだろうと市河君に言われたとのことである」〈田中秀央（1970）「John Lawrence 先生と市河三喜博士」英語青年 116-7, p. 6〉。

大学院時代に、恩師ロレンスの勧めにより、市河三喜、東京帝国大学英文科出身の土居光知と三人で共同生活をする事となった。駒込に一軒家を借り、田中は給費生、市河と土居は家庭教師などをしながらお互いに切磋琢磨して勉学に励んだ。この時に市河は田中の性格についてよく知ることとなり、随筆で何度かそのことについて触れている。

「古典学者で T 君というのがある。専門から浮世ばなれしているが、学生時代には恩師ケーベル先生から big baby（大きな赤ん坊）と言われていた。ある意味においてこれは一般学者の通有性とも言えるが、しかし当の T 君は非常に規則正しい生活をしていて、一しょに下宿していた時も、朝は五時に起き、井戸端で冷水摩擦をする、それが左腕は何回、右腕は何回と、ちゃんときまっている。食後は必ず三十分間散歩をする。雨が降ればそれに代る運動をする。ホーマーを読んでいても正十二時になれば、たとえあと二三行で巻の終りになるところでもピタリと本を閉じて下へおりてくる。その時食事の用意が出来てないと「恥を知れや！」と言って御機嫌斜めだ。夜は九時に寝るから、集会でも何でもそれに間に合うように退席する。（略）ある時私達は六時の食事に呼ばれたが、見物の都合でどうしても間に合わず、三十分ほど遅れて行ったらすでにお客なしで食事を済ませていた。遠来の珍客に対しても時間厳守の鉄則は破ることができないのである」〈市河三喜（1957）『旅・人・言葉』ダヴィッド社, p. 179, p. 222〉。

2 年間の同居生活のあと、田中は渋沢栄一家の学寮の監督となり、栄一の孫の渋沢敬三⁶兄弟とともに生活することになる。この学寮は渋沢栄一が孫たちのために家を借り、監督者をおいて共同生活をさせたものである。ここでも田中は時間厳守の鉄則を守り、まだ中学生であった敬三兄弟に対して厳しく監督した。

明治 45 年（1912）3 月、田中秀央は東京帝国大学文科大学の講師となり、ギリシア語とラテン語を担当する。しかし大正 3 年（1914）に結婚したこともあり、講師の月給 30 円では足りず、中学の英文法・英作文の嘱託教師となったほかに、旧広島藩主浅野侯爵家で英語の家庭教師も務めた。

大正 9 年（1920）7 月、京都帝国大学文科大学講師となった。京都帝大に採用されるについては、三高時代の恩師である榊亮三郎が東上した際に、田中の意向を質した。一方、東京帝国大学でも田中の海外留学や助教授就任について上田万年文科大学長に進言するものもあったが、上田からの色よい返事はなかった。同期の市河三喜は留学をし、大正 5 年（1916）には東京帝国大学助教授に就任している。田中は榊亮三郎に対して、勉強をさせてくれるのならば京都へ行く、との返事をした。その後、京都帝国大学文科大学の教授会では田中秀央を助教授として迎えることを満場一致で決定した。この人事について東京帝国大学に知れるところとなり、田中は市河三喜から、東京は京都と同じ待遇をするから東京に残らないか、と勧められ、また他の先生方からも、恩知らずだ、などの非難を受けたが、田中は京都帝大との約束を破ることは出来ず、結局、京都へ行くこととなった。この後、終生、京都で暮らすこととなる。

大正 9（1920）年 11 月助教授に昇格、大正 11（1922）年 7 月から 13 年 9 月まで留学、主にイギリ

6 渋沢敬三（1896-1963）は渋沢栄一の嫡孫として財界活動をする一方、民俗学の研究を行い、民俗学界のパトロンであった。戦前から戦後にかけて日銀総裁、大蔵大臣を務めた。

スのオックスフォード大学で西洋古典を研究し、フランス、イタリア、ギリシア、ドイツ、アメリカを歴訪した後、帰国した。大正 14 年 (1925)、ラテン語で執筆した論文「羅甸助辞 quin 及ヒ其ノ歴史的慣用ニ就キテ」で文学博士となる。昭和 6 (1931) 年 3 月、京都帝国大学文学部教授に昇格する。

田中は、京都帝大には西洋古典語学担当の講師として着任したが、当初は言語学講座の一部として、ギリシア語、ラテン語をそれぞれ週 4 時間ずつ、後に週 6 時間ずつ教え、教授昇格後は西洋文学第二講座担任となり、ギリシア、ラテン両語のそれぞれ週 5 時間の講義以外に、古代ギリシア文学史、ラテン文学史概説を講じた。

田中の在任中の昭和 11 年 (1936)、東京帝国大学言語学科の大先輩で、京都帝国大学言語学講座担任の新村出⁷が定年で退官した。後任については、新村と同じく言語学科の出身ということで、田中に打診があったが、田中はこれを断り、京都帝国大学法科大学出身で、その当時は文学部西洋文学第三講座を分担し、フランス文学を講じていた落合太郎⁸を推挙した。しかし落合の就任はすんなりとは決まらなかった。言語学講座担任となるには教授に昇格する必要がある、そのためには学位が不可欠であった。落合は論文を提出したが審査が長引き、落合は九州帝国大学へ赴任することを考えるようになった。田中が説得して落合は思い留まり、学位論文も通過して、落合太郎はようやく教授に昇格し、言語学講座担任となった。

田中秀央は昭和 21 年 (1946) 3 月、定年により京都大学を退官し、翌年、名誉教授となった。昭和 24 年 (1949) 4 月、創立されたばかりの京都女子大学教授となり、英文科に属してギリシア語、ラテン語、言語学を教えた。昭和 36 年 (1961) には紫綬褒章を受章。昭和 49 年 (1974) 3 月に京都女子大学を退職し、同年 8 月 6 日、88 歳で没した。田中の座右の銘は、恩師ケーベルより、せっかちである田中に贈られたラテン語の *Festina lente* (ゆっくり急げ) であり、田中の著書の多くは、前書きをこの言葉で締めくくっている。

田中秀央は西洋古典語学を専攻した最初の日本人だったので、古典語の文法書や辞書などの基本図書の整備から始めなければならなかった。主要なものとしては、

(1915)『羅甸文法』丸善

自序で「我国も、世界に雄飛するやうになつた上は、語学者と云はず、文学者と云はず、哲学者と云はず、法学者と云はず、苟しくも欧州文明を研究せんとする者は一皮相の攻究を以て満足せず、自ら直接に欧州文化の源泉に接せんとする人は、少なくとも希臘語と共に羅甸語を学ぶ必要があると思ふ」とギリシア語、ラテン語の必要性を述べているが、これは現在でも変わることはない。序文は、恩師ケーベルが日本語訳付のドイツ語で寄せているほかに、藤岡勝二がローマ字による日本語で寄せている⁹。ラテン語の文法書は明治時代にいくつか出版されているが、本格的な文法書としては田中の『羅甸文法』に始まる、といって過言ではない。

(1927)『希臘語文典』岩波書店

7 新村出は田中秀央の 10 年先輩であり、田中の東京帝国大学入学と入れ替わるようにして、新村が京都帝国大学に赴任したため会う機会がなく、田中が京都に赴任した時が新村との初対面であった。

8 落合太郎 (1886-1969) は東京神田駿河台に生まれる。1913 年京都帝国大学法科大学卒業。1916 年黒岩涙香が出資し黒岩の長男に経営を任せた米問屋の総支配人となるが、放漫経営により翌年倒産、廃業。1918 年 12 月より 1922 年 5 月までフランス留学。1919 年京都帝国大学法学部講師 (国際法)、1920 年文学部講師 (フランス語フランス文学)、1931 年京都帝国大学文学部助教授。

9 藤岡勝二には (1906)『羅馬字手引』新公論社、の著作がある。

- (1929)『新羅甸文法』岩波書店
- (1950)『ラテン文法入門』臼井書房
- (1953)『初等ラテン語読本』研究社
- (1954)『初等ラテン語文典』研究社
- (1955)『初等ギリシア語文典』研究社

辞書としては、

- (1937)『ギリシア・ラテン引用語辞典』岩波書店、落合太郎共編著
- (1952)『羅和辞典』研究社

があり、類書がないため、現在でも新本で手にすることができる。前者は落合太郎との共編著であるが、落合から1951年10月6日付の田中宛書簡が残されている。

「(略) どうも恐縮のほかありません。最初のおはがきを拝見して、やりかけの分をまとめて持参しようとしてゐましたところ、急用で北海道へ出張しました。それから東京まで戻って、学校の来年度予算やら何やら、行政整理関係の厄介な用向きで日が立つてしまひました。(略) 失礼をかさねる仕儀となりました。festina, festina のおこころちはよくわかつてゐますが、右様のしだい、どうぞ御かんべん下さい。(略) オクスフォードの引用語辞典一九五〇年版を手に入れました。すでに御覧ですか。われわれのものと照合しかけてゐます」
〈菅原謙二他編(2005) pp. 250-251〉。

『引用語辞典』増補第3刷が1952年に出版されているので、その前のやりとりと思われる。おそらく田中が落合に原稿催促の葉書を出し、それに対して落合がいろいろといいわけをし、田中の座右の銘を引きながら詫びている。時間厳守をモットーとするせっかちの田中秀央らしいところである。後者の『羅和辞典』は、田中秀央の薫陶を受けた国原吉之助の(2005)『古典ラテン語辞典』大学書林、が出版されるまで、我が国唯一のラテン語辞典であり、1966年に増訂版を出し、以後毎年のように増刷を繰り返していた。

文学史としては、

- (1933)『希臘文学史』富山房、井上増次郎共著
- (1939)『詳説ギリシア文学史』刀江書院、黒田正利共著

両書共に、共著者が全体を書き上げた後に、田中が通覧し推敲を重ねて成書した。後者は752頁の大冊である。

(1943)『ラテン文学史』生活社、(1989)名古屋大学出版会より復刊
言語学関係の専門著書はなく、わずかに語源と英語に関する小さな本だけである。

- (1955)『西洋古典語源漫筆』大学書林語学文庫

奥付の題名は「西洋古典語源漫筆」であるが、外表紙の題名は「英語語源漫筆(古典語篇)」。

中身はアクセサリーからヴァーチューまでの94語について、片仮名の日本語を見出しとして、英語、ギリシア語、ラテン語を示し、語源解説をしている。

- (1963)『英語の語構造 西洋古典語からみた』泉屋書店
- (1972)『語源百話 文化史的に見た外来語』南江堂

英語を見出しとして語源を解説したもので、『西洋古典語源漫筆』の増補版である。

田中秀央は西洋古典を中心として、多くの翻訳書も出しており、そのほとんどは共訳である。

(1916)『ユスチニアヌス帝欽定羅馬法学提要』三版, 帝国学士院

(1917)『ガイウス羅馬法解説』再版, 帝国学士院

(1917)『ウルピアヌス羅馬法範』再版, 帝国学士院

この三書は、明治から大正にかけての政治家で、文学博士・法学博士である末松謙澄子爵の訳並びに註解、法制史学者の宮崎道三郎¹⁰校閲で、田中秀央の名前はわずかに再版緒言に「田中学士」が出てくるだけである。これらの本は田中抜きで初版が出されたが、校閲者である宮崎道三郎に田中が誤訳や脱落を話したことが末松謙澄に伝わり、末松が教えを請いに、わざわざ田中の自宅を訪ねた。田中は度々末松の自宅を訪ね、末松の訳文に手を加え、大いに協力した。末松の自宅でのエピソードで田中の性格を如実に示しているものがある。

「昼食の際、私が最も困ったのは子爵が食事中でも時々、食後は直ちに、よくローマ法の原典で我々が論じていることの質問をされることであった。ところが私は少年時代からずっと、食事中は学問のことは一切口にせず、食事と食後の休息には一時間を与えることにしていたので、これには全く困った。それでも最初のうちは致し方なく負けて御相手をしていたが、考えてみると我々の仕事はかなり長くかかることなので、このようなことは全く度々起ると考えられた。そこで私は終にこれを避けるために、食事が終ると直ちに立って、便所へ行く振をして、先生の御家の数室をぶらついて多くの書画を拝見して時を過して席にかえることにした」〈「自叙伝」 pp. 123-124〉。

西洋古典の翻訳も多く共訳で出版しているが、代表的なものとしては、

(1932)『ゲルマーニア』刀江書院, (1941) 新版, 刀江書院, (1948) 創元社, (1953) 岩波文庫
泉井久之助¹¹と共訳で、1932年版には巻末にラテン語原文を付していたが、1941年版以降は削除した。

(1940, 1941)『アエネーイス』上下2冊, 岩波文庫, 木村満三共訳

木村が英訳本から重訳したものを田中がラテン語原典に照らして修正した。

(1960)『マーズ・カルタ』京都女子大学出版部, (1973) 東京大学出版会より復刊

ラテン語原文対訳に註解を加え、用語集と索引を付した。欧米で出版された訳本からの英訳と独訳を掲げている。

ギリシア語、ラテン語学習用の対訳本も出している。

(1927)『ホラティウス詩論』岩波書店, 黒田正利共訳

(1961)『クリトーン』大学書林語学文庫

(1963)『ゲルマーニア』大学書林語学文庫, 国原吉之助共訳

2. 前田 太 郎

前田太郎は30代の若さで死去したため、現在ではまったく忘れ去られた言語学者である。出身は愛知で、田中秀央と同年同月の生まれというから¹²、明治19年(1886)3月に生まれたことになる。第三高等学校で田中秀央と同級生となり、そのまま一緒に東京帝国大学文科大学言語学科に入学、卒

10 宮崎道三郎については、拙稿(2005)「初期の博言学科卒業生」学苑 775, を参照。

11 泉井久之助(1905-1983)は落合太郎の後任の京都帝国大学文学部言語学科主任教授。

12 前田太郎の遺著である『外来語研究』の田中秀央のあとがきに拠る。

業した。大正10年(1921)4月25日に逝去した。前田については同期の市河三喜が追悼文でその業績について簡単に触れている。

「前田太郎君と始めて相識つたのは明治三十九年であつた。其年帝大の言語学科に入学した者は自分を加へて四人、前田君も其の一人で同君は三高から来られたのであつた。在学中はギリシヤ、ラテン、ロシア、イタリア、朝鮮、アイノ、支那等各国の言語を研究され、殊にロシア語は熱心に続けられ文学書を読み得る程度迄進まれたのであつた。四十二年大学卒業後は大学院学生として、言語より見たる文化の発達といふ方面に特に注意して研究を積まれ、折々の研究は歴史地理、史学雑誌、郷土研究、心理研究等の諸雑誌に発表され、人名に関する研究、誤写の研究等は価値ある論文として知られて居る。(略)『日本外来語辞典』(三省堂発行)に対しても前田君の援助は多大なものであり、藤岡博士の『大英和辞典』(大倉書店)の為には病革まるの日迄献身の努力を尽して居たのであるが遂に完成を見ずして不帰の客となられた」〈市河三喜(1921)「前田君に関する事ども」英語青年45-9, p.280〉。

卒業後は言語学教室の副手となり、上田万年他編(1915)『日本外来語辞典』三省堂書店、の編纂に協力。藤岡勝二編(1921, 1932)『大英和辞典』全2巻、大倉書店、の編纂に協力、というよりは前田太郎の編といってよいほどの注力であつた。この英和辞典をめぐるのは、前田の死後、遺族と大倉書店の間でトラブルがあつた¹³。つまり、実際の編纂者は前田太郎であるのに、藤岡勝二著としていくことと、この辞典の編纂が前田の命を縮めた、との思いが遺族側にあつたようだ。これに対して、藤岡勝二は、前田太郎の遺著(1922)『外来語の研究』岩波書店、の巻頭で次のように述べている。

「外来語辞典のまとまつたのは君の骨折りによることを知つてゐた私は、大英和辞典にも手を籍してもらつてゐた。いふ通りに快く、いかにも好んで力を注がれるのには、深く信頼せざるを得なかつた。(略)熱が去りにくいと聞いてからは、とてもいゝ氣になつてはゐられないと思ひつめた。無理なことはしてもらへないと注意したが、君はあくまでこの事を続けるつもりでゐた。友人の勧めにも応じなかつた。病中でさへ刷り上げを見ることを楽しみにしてゐた。めつたに手紙を書かない君は、逝く前の冬に、わざわざ封書をよこして、どうかこれは相変らずやらせてくれとたのんで来た。いかにもつらかつたが性分も察してゐるし、どうもやめたくないことが明かなので、さからはずにそのまゝにしておくより仕方がなかつた。人々からは残酷に思はれてゐたこともあるが、やむを得なかつたのである」〈藤岡勝二「前田太郎君の遺稿のまへに」『外来語の研究』巻頭, pp.1-3〉。

琉球方言の研究者である宮良當壯(1893-1964)は沖縄県八重山の石垣島出身で、18歳の時に上京し、納豆売りをしながら学校へ通うという苦学生だったが、前田家で毎日納豆を1本買ってくれるようになってからは、自分の家のように前田家に入出入りすることを許され、前田太郎に兄事するようになった。前田太郎は物心両面で宮良を援助し、宮良は前田のカード書き、原稿の清書、索引の作成などの他に、前田の家族の送り迎えや留守番など家庭内の雑用をすべて引き受けていた。宮良にとって前田太郎は大恩人であり、宮良は前田のことをたびたび文章にし、また日記には前田太郎と前田家のことがしばしば登場する¹⁴。

前田太郎は早世したが、多くの論文を書き、以下のような書を著している。

13 拙稿(2007)「藤岡・新村時代の言語学」学苑797, を参照。

14 (1980-)『宮良當壯全集』全22巻、第一書房、未完結。

(1912)『英語自由自在』文成社

本文 548 頁、付録 102 頁と大冊の実用的英語参考書で、大正 3 年 (1914) で 39 刷発行。一回の刷部数は不明であるが、それにしてもかなりの部数が発行されたようだ。後に (1924)『ABC から教へる先生』朝野書店、として、付録をカットし、大幅に縮小して再刊された。

(1913)『エスペルゼン教授 語学教授法新論』東亜堂書房

原著はデンマークの英語学者 Otto Jespersen のデンマーク語によるもの。英訳本の *How to Teach a Foreign Language* から日本語に訳した。後に英語学者である大塚高信の序文をつけて昭和 16 年 (1941) に富山房から再刊された。

(1913)『生ける屍』敬文館

トルストイの戯曲をロシア語原文より翻訳した。はしがきで、前田自身のロシア語習得について、言語学科の大先輩である八杉貞利¹⁵を師として研鑽を積んだことを述べている。

(1914)『世界風俗大観』東亜堂書房

様々な国の習慣、神話、諺等について、海外の英語、ドイツ語論文を訳出した。

(1922)『外来語の研究』岩波書店

学術雑誌に発表された多くの論文と遺稿をまとめて出版された。半分以上の 183 頁までが外来語の文献学的研究で、国語の外来語、外来語の形式、外来語の生命、外来語の母語、の章に分かれている。纏まった外来語研究としては日本で最初の書である。巻末には、人類学雑誌、史学雑誌等に発表された著作目録が付してある。巻頭には藤岡勝二が、巻末には田中秀央が文を寄せ、言語学科で同窓の市河三喜、橋本進吉、金田一京助、それと宮良當壯が校正を担当した。

3. 高畑彦次郎

東京帝国大学言語学科で田中秀央、前田太郎と同期であった高畑彦次郎も、現在では忘れ去られた言語学者であるため、その経歴や人となりについて詳しいことはわからない。京都出身で、生年は明治 16 年 (1883)、卒年は昭和 20 年 (1945)。中国語学を専攻として、次の 2 書を著している。

(1937)『周秦漢三代の古紐研究』上下 2 冊、東方文化学院京都研究所研究報告第 10 冊、東方文化学院京都研究所

(1939)『古韵研究』東方文化研究所研究報告第 13 冊、東方文化研究所

両書とも、中国音韻学の専門書で、前者については河野六郎¹⁶が (1939)「言語研究」第 2 号、で批評を加えながら詳しく紹介している。漢籍を中心とする高畑彦次郎の蔵書は、京都女子大学に高畑文庫として所蔵されている。

参考文献

(1986)『東京大学百年史』部局史 1、東京大学出版会

(1986)『東京大学百年史』資料 3、東京大学出版会

15 八杉貞利 (1876-1966) は明治 33 年 (1900) 東京帝国大学博言学科卒。ロシア語学のパイオニアで、東京外国語学校教授としてロシア語教育に従事した。

16 河野六郎 (1912-1998) は昭和 12 年 (1937) 東京帝国大学言語学科卒。東京教育大学文学部言語学科教授として教育、研究に携わった。専攻は朝鮮語学、中国音韻学。

『帝国大学一覧』帝国大学，1886年から毎年出版，1898年以後は『東京帝国大学一覧』

『京都帝国大学一覧』京都帝国大学，1913年から毎年出版

(2005) 菅原謙二他編『田中秀央 近代西洋学の黎明:『憶い出の記』を中心に』京都大学学術出版会，「田中秀央自叙伝『憶い出の記』」を中心に編纂された。

(1974)「故田中秀央先生履歴・著作目録」英文学論叢 18，京都女子大学英文学会

*引用に際し，旧字体は新字体に改め，段落は適宜追い込み，あるいは改段を施した。

(さとう よしゆき 総合教育センター)